

英語教育研究から見た哲学教育

網谷祐一 (Yuichi Amitani)

会津大学

わたしの専門は生物学の哲学であるが、前任校では英語担当教員として採用された。わたしには英語教育学の経験はなかったが、いくつかの理由からそれに携わることになった。具体的には、英語多読指導(従来よりもやさしいレベルの教材を大量に学生に読ませて、英語の流暢さを養う指導法)を題材に英語教育に関する論文を執筆し、そのうち一本は国内の英語教育を専門とする雑誌に掲載された(Amitani Y.: The Effects of “L-S Reading” in English Extensive Reading. *HELES Journal* 18:51-65, 2019)。

本講演では、わたしが英語教育研究を行う中で経験したことを振り返り、そこから哲学との違い、また哲学教育(研究者養成のための教育および一般教養科目の教育)に得られる教訓について考える。

そうした教訓は二つに分かれる。一つは、論文を執筆する際にわたしが困難を経験した事柄への考察からくる。英語教育学は敷居が比較的低い分野であり、大学院等で専門教育を受けていない人でも一応の論文が書けるようにマニュアル・ハンドブックが整備されている(例えば竹内・水本編『外国語教育研究ハンドブック——研究手法のより良い理解のために』、松柏社;東京, 2012年)。しかしわたしが実際に論文を書く際にはマニュアルに出ていない事柄が生じ、そうした問題を適切な形で処理しなくてはならなかった。一例を挙げる。研究のためにはリサーチデザイン、実験デザインおよび分析のための統計手法(t検定、分散分析など)を決める必要がある。これはマニュアルに記されている。しかし各統計手法には適用のための前提があり、その前提を満たしていない時にどうしたらよいか(分析をあきらめるべきか——その場合別の手法があるのか——、釈明の方法があるのか)は、通り一遍のハンドブックには書かれていない。わたしの想像ではこうした知識は、大学院における指導教員や友人等のやりとりを介して得られている。このことから研究者養成のための専門教育の価値の一つはこうしたローカルナレッジを(しばしば暗黙的な仕方)で提供することにあると論じる。

もうひとつの教訓は、哲学教育についての論文を読む中で、「英語教育の研究者なら現在の哲学教育研究に対してどういう意見を持つか」という問いから得られる。英語教育研究者の目でもって現在の哲学教育の論文・本を見ると、指導法の結果についての記述が薄い場合があることに気づく。例えば英語教育の論文では、新しい指導法の提案には通例効果・結果についての記載がある。これに対して大学に一般教育科目の「哲学」の新しい指導法を提案した論文を読むと、その指導法の効果・結果への掘り下げ方が薄いと感ずることがある。もちろんこれについては、各科目に関する能力測定の難易度の違いなど、英語教育と哲学教育を同列に語れない点もある。しかし研究方法を工夫すれば、哲学教育の結果についても考えることができ、それは哲学サークルを超えた訴求力を持つ点で薦められると主張する。